

# 月下庭園

osi7

1. 追跡

2. 月下庭園



猪突盲信  
坂本 七重



愛の復讐者  
天満寺 琴乃



昼行灯  
カギリ



怪異と過去を封じられた者  
岡 彩月



殺すよ？  
カミヒ



雲隠れした魔術師  
秋月 みさき



あの赤い部屋から、あの二人と一緒に外に出ていたら。

魔女がいう別の怪異とやらがどのようなものかわからない。学園の七不思議のどれかで呪い殺されたのか、もつと効きが早く死に直結するような別の怪異なのか、それとも異界にいた元・北川君のような怪物に殺されたのか、わからない。

一緒にでいたらたぶん、私もともに死んでいただろう。でも、死ぬ前にあの二人が何を話して、どんな気持ちであったのか、それを知ることができたら私は死んでも悔やまなかったに違いない。知らない方がいいことを知りたいと思う自殺願望めいた愛情は抑えがたいのだ。どうせ死ぬほど辛いことがあるんだろうけど、あそこで私があの人二人の身代わりになって死ぬば、控えめに見積もつても、その二人の心に私という形が刻まれる。

『あの二人は未来永劫、お前の前に現れることはない』

今、私の心に彼女たちが刻まれているように、だ。

それが、今も私の足を魔女の元に向かわせる理由。

二人がいなくなったのを知ったのは、あの日からほぼ一週間経ったあとだった。まあ、先輩に家に送り届けられたあとと我に戻ったら具合悪くなって一週間寝込んだので、学校に出てきたら二人はいないという状態だったのだけど。

それを知ったあとすぐさま早退して、家の端末からオンラインニュースや学校の掲示板のログを漁り、親しかった友達に引かれるほどのメッセを送りまくった。『女子中学生 御坂<sup>みさか</sup> 失踪』の検索結果を数百ページも遡った。翌朝、日が昇るまで水しか飲まずに二人の行方を調べた結果は『オンラインの情報のほとんどはノイズ』ということがわかっただけだった。

それから、ロクな目にあっていない。

今日も魔女に連れられて浮遊大陸を観光するはずが、大木が頭の上に落ちてきたり、どこかの軍人さんに遠距離から狙撃された。さらに、友達がまるで鬱病患者のような覇気のない姿になっっているのを見た。

心身共にダメージを受けた私は、御坂学園の最奥にある研究棟からマンションに戻った。親が見繕ったこの部屋は中学生の一人暮らしには贅沢かも知れないけど、寄宿舎のような監視の厳しい所じゃないので、こんな深夜に帰ってきて見とがめる人がいないのはありがたいことだ。疲れ切った私をさらに責めるような仕打ちには耐えられそうにない。このまま倒れ込んで眠りたい。

暑苦しい防弾チョッキを脱ぎ捨ててソファに転がったが、目を閉じる数秒の間に、壁掛けのディスプレイの隅で明滅するメールアドレスに気がついてしまった。

ポケットからつまみ出した端末からオンラインのメールボックスを開くと、差出人は『秋月』とある。私を浮遊大陸に引つ張り出した張本人だ。どうせまた食料の買い出しとか、変な機材の購入代行とか、そんなような雑用だろう。丸一日歩かせたくせに、まだ休ませてはもらえないらしい。

ちらりと見て面倒そうなおつかいだったら無視しよう。そう思って開いた。

『明日からは研究室に来るな。死ぬぞ』

なんとも唐突なメールだ。

翌日の放課後、メールを完全無視して秋月の研究室を訪れたところ、だれもいなかった。

耐食性の黒テーパーと、その間にうずたかく積まれているガラクタはそのままで。金属部材や石材、真つ二つになったシヨベルカーのスコップ部分、動かない柱時計などは片付けもされず、昨日来た時と変わらない。しかし、窓ガラスのように偽装されていた環境透過ディスプレイは端っこにログらしきテキストを表示しているのみで、外の風景も浮遊大陸にも映しておらず、黒いつや消しの板と変わらなかった。

光源になっていた環境透過ディスプレイがないため部屋の中は暗く、入り口を開けた私の影が長く差し込んでいた。暗闇の中に踏み出すと、靴の裏を砕けた石片が刺激する。

まるで廃墟だ。

闇の中で明滅するログに吸い寄せられるように、私は環境透過ディスプレイの前に立った。装置が壊れたときに表示される診断ログかと思っただけど、実際には暗号でスクランブルされた画像メッセージだった。スクランブルの横縞がテキストのように見えるのだ。

「……暗号解除」

つぶやくと、スクランブルの真ん中にテキストボックスが現れた。そこには一文、

『真実を求める者の名は？』

と、表示されている。パステルで解除される類のモノらしい。

「……天満寺琴乃」

しかたなく自分の名前をつぶやいてやると、スクランブルが解けてファイルが展開された。自身は画像は三枚ほど。

解像度の粗い白黒の写真だった。

どこかの店舗の入り口を映している監視カメラの画像らしい。店内の照明が強くて、店の窓ガラスや自動ドアは白く飛んでいる。右端に日付と時間の文字が黒く滲んでいた。パーカーのフードをかぶった人が、光あふれる自動ドアから出てくるところを映されていた。フードから長い髪の毛が出ているのと、ホットパンツを履いているところから女だろう。元々の解像度の低さと人影が動いているせいで顔は全くわからない。

動画には撮られた場所の位置情報と商品を購入した履歴のデータがついていた。位置情報は数字の羅列だが、これは見たことがある。検索エンジンに入力すれば位置がわかるはずだ。購入履歴はお弁当と飲み物。支払い方法は銀行の電子ウォレットで口座名義が霧上観世子。

「霧上……？」

予想外の名前が出ていた。

次の画像。同じようにどこかの監視カメラの映像で、日時と位置情報と購入履歴。顔は見え

ない後ろ姿であるが、同じようなパーカーとジーンズ姿で映っている。支払いは同じく霧上観世子の電子ウォレット。

三枚目も確認する。同様の写真で似たような人物と購入履歴のデータ。最初の写真だけ日付がふた月ほど前で、他は先月だ。

最後のデータを閉じると、代わりにメッセージがポップアップした。

「言いつけを守らない生徒にヒント…写真は警察が撮影した。この人物は死んでもいないし生きてもいない」

謎かけはたくさんだったのでさっさと閉じて、自分の端末に画像をコピーした。

警察が撮影か。本当だろうか。

## 2

家に戻るなり端末を立ち上げてネットの海に浸る。

まずは情報の真偽を確かめる。秋月は自分の都合のいいことだけを言って、それ以外は言わ

ないか、わざと誤解するように伝えてくる魔女だ。裏付けは自分でも取った方がいい。

位置情報から撮影された場所の風景を調べると、撮影された場所は県境のベッドタウンらしい。特定したお店の周りで、写真の角度で撮影できるところに警察の監視カメラが設置されていることを確認する。

監視カメラは実在しているようで、どうやら写真は信用できそうだ。でも、店の外にあるカメラと、その店で買ったものの情報がどうして一つにまとめられているのだろうか？ 警察なら購入履歴を店に要求することも出来るだろうけど、なぜそんなことをしたのか。

「……追跡しているんだ」

あの日に境に姿を消したのは、倉池あかりと霧上観世子の二人だ。また、その数日前に篠原麻美と宮川恵が失踪している。捜索願は当然、四人とも出されているはずだ。そのうちの一人がこうして写真を撮られている。この店でお弁当を買ったときに電子ウォレットで決済したから見つかったのだろう。全ての買い物で現金のみで済ませるのはこのご時世では不可能だから別人になりすまさない限り、捜索対象のリストと決済の時の認証情報を照らし合わせればいずれば見つかる。

でも、それなら警察は霧上さんをすでにみつけているということではないか。二ヶ月も前にみつけていて、そのあとも足取りがつかめていて、どうして保護していないんだろう。

翌朝、学園に登校した。徹夜で考えても答えが出ないこともある。もしかしたら担任にはなにか連絡が来ているのかもしれない。

睡眠不足の体にコンビニで買った羊羹ようきんで喝を入れ、運動部の朝練すらはじまっていない学校へ向かった。朝日が染みる目をしばたかせて職員室へ行くと、当然誰もいなくて待つ事態に陥る。廊下に体育座りで座り込む私を一番初めに発見したのは、高等部の先生だった。徹夜でろくにご飯も食べていない私は、あまりに酷い顔をしていたのだろう。職員室の会議スペースに保護され、担任の先生がくるまでの一時間を給茶機の薄い緑茶で満たすこととなった。

入り口から担任の顔が半分ほどでたところで椅子を蹴倒して立ち上がった私は、つい詰問口調で霧上さんの行方について尋ねたが、中年にさしかかったばかりの冴えない男性である担任教師は、立ち上がった勢いでふんわり広がったままのツインテールを胡散臭げに眺め、一言いった。

「天満寺君、寝てないようだがまさか夜遊びしていたわけではないね？」

「してません。それより、霧上さんは見つかったんじゃないんですか？」

担任は何も答えずに私の横をすり抜けて自分の席に座る。儼劫げんせつそうな動作から私に教えたく

ないことだと直感した。

鞆から端末を取り出して仕事の用意を始めた担任の横に立つ。

「……それとも、見つかったっていうのは嘘で、本当は死んでいるんですか？」  
わざと間違ったことをいってみる。

「死んだア？ 何を言い出すんだ天満寺君」

起動キーを入力しようとした手が止まって、私を見る眼が胡散臭げなものから怪訝そうなものに変わった。

「クラスで噂になってます。倉池さんや篠原さんや宮川さんだって、こんな立て続けにいなくなるなんて、何か事件に巻き込まれたに違いなんて」

行方不明になった他の三人の名前も出して様子をうかがう。

「——篠原君と宮川君は、きみとは親しかったと聞いている。倉池君もだ。きみこそ、何か知っているのではないかね？」

担任の怪訝そうな顔は変わらない。私は力なく首を振った。

「親友です。だから、なんの相談もなくなりましたみんなを捜したいんです」

担任の鼻から溜めた息が抜ける。再び端末に向かって手を動かし始めた。

「……これはおおつびらにはいえないことになっている。だが、親友の君だから特別に教えておこう。誰にもいうんじゃないぞ」

「はこ」

「霧上君の行方がわからなくなってから、ご両親から搜索願が出されていた。警察からはすぐに本人確認の依頼が来たよ。私も見させてもらったが、街頭の監視カメラがパーカーを着た女の子を写っていた。画質が悪いのでそれだけだと本人とは判断できなかった。警察はこの人物が霧上君名義の電子ウォレットで決済をしていたので、本人である可能性が高いと話していた」  
キーボードの打鍵音に紛らわせるように、声のトーンが下がっていた。

「電子ウォレットが盗まれたものである可能性はもちろんある。だから写真を見せたんだろう。写真はいくつか見たが、背格好はだいたい同じだし、パーカーもいつも同じだった。本人かどうかはわからないが、明らかに違うというのでなければ、一度接触してみるとい話だった」

「……………」

「警察が明日接触してみるから、もし本人だったとこのためにご両親も近くで待っていてくれと連絡があった矢先に、突然警察からの連絡がなくなった」

……なくなっただけというの。それは霧上さんがまた邪魔者をどうにかしてしまっただけというこ

となんだろうか。

最悪の展開を想像する。

「連絡が来て数日、何の音沙汰もなかった。一緒に行ったはずのご両親からも連絡がなかった。本人かどうかの結果報告もなかったの、こちらから警察に連絡をして、どうだったのかを聞いた。すると、結果報告がなかった理由がわかった。警察が接触する直前に、家出届が受理されたからだった。

……家出届がどのようなものは、わかるか？」

「ええと……」

学校で習ったことがある。けど、自分には関係ないと思っただので覚えてなかった。

「……家出届は、子供がその生活環境に起因する苦痛から逃れようとするのを保護する制度だ。十年ぐらい前にできた法律だから公民の授業ではまだ教えてないかな？ とにかく、虐待や両親の不仲による精神ストレスなどの家庭内の問題からイジメにジェンダーの問題まで、ありとあらゆるものから逃げて環境を変えることを許す、子供版の駆け込み寺制度だよ。子供本人の意志のみで可能で、親権の行使は停止され、警察によって子供の行方は隠される。子供は新天地で転人生として扱われ、何不自由もなく勉強に専念する。その間の一切の費用は国が立て替

えて支払い、親に税金として請求するので金銭面での心配もなにもない。

ただ、子供は成人まで孤独を強いられる。私は嫌いだね、この制度は」

「はあ……」

「……それまで捜索に協力してくれていた警察は逆に霧上君を隠した。ご両親は、人違いだったと言われて帰されたらしい。あとで実際には家出届が提出され受理されたことを警察から聞いて、呆然としたそうだ」

「ということは」

担任は大きく頷いた。

「霧上君は警察が保護しているも同然だ。私には会う手段がないが、どこかで元気にしているだろう」

霧上さんが生きていることはこれで確定した。生きているなら、会うしかない。会って、あのあと何があったのか訊かなければ。

秋月が持っていた写真が、担任教師が見せられた写真なのは間違いない。最初に撮られた写真のあと、家出届が出されたのであれば、そのあとの二枚の写真は警察に保護され始めてからの写真ということになる。写真の場所に付与されていた位置情報は一枚目と二枚目三枚目でそ離れていない。家出届が出されてからもその前と同じ場所に住んでいるか、近いところにいる。私は職員室を辞し、教室に向かう代わりに保健室に入った。そこで午前中を潰して睡眠を取ったあと、頭が痛いと言って早退した。

嘘じゃないし。

家に着くと、端末で家出届の詳細を調べる。家出人の今の住所を調べるためだ。

もちろん、警察が保護しているんだから警察が教えてくれるはずはない。しかし、家出届は引越のようなものだから、元住んでいた場所の役場にいけば何かわかるかも。他にも、手紙を出すから住所教えてもらおうとか、クラスメイトであることを言えば教えてもらえるのでは。

そう思って調べていたけど、だんだん眉間に皺が寄っていくのを感じた。

手紙、警察が預かって本人に転送するのでムリ。

役所、家出届を通った人間の戸籍は元のまま。書類上は引越ではない。

直接聞きに行っても門前払いされたという書き込みが多数。

ううむ。

まともなやり方では駄目なようだ。

他で住所を知らないといけないものというと……。

宅急便とか、お中元とかのギフトとか、物を送るようなものぐらいだろうか。

ネットで検索すると似たようなことを調べている人が多いらしく、質問掲示板にはそういう書き込みがたくさんあった。親御さん達がやっぱり探そうとするんだろうな。

荷物の中に発信器を入れるのは、ダメらしい。家出人への送付は家出前の住所に送るように案内されている。宛先が家出人だった場合は業者が警察に転送し、警察のほうで住所を書き換えて業者に再配達させるようだ。そのとき、妙な発信器が仕込まれてないか電波検査とX線画像検査をされるとのこと。疑われる場合は開封して内容確認後、故意であれば差出人を罪に問える、とまで書いてあった。

結構、厳しい。

もっと調べていくと、再配達されるときは元の運送業者を使うという書き込みがあった。

これを信じると、運送業者は書き換え前と後の住所の両方を知ることができる。が、そこに入り込んで、とかは厳しいだろう。仕分けなんて自動化されて久しいし、よく考えてみればバ

ーコードで示されただけの住所なんて機械を通さなければ読めない。

そもそも、物理的に運送業者として潜り込むこと自体がムリだけど。

ギフトでも調べてみた。デパートやスーパーなどの店舗やネットで注文して、注文を受けた店が宛先に直接届けるものだ。

ただ、こちらは全然情報がない。それはそうだ。家出した学生にギフトを送る人なんていない。実家にいた頃は、親宛にギフトが送られてくることがあった。親が会社の社長とかしてるもので、取引先やお得意様からの贈呈品ほうていひんや贈答品ぞうとうひんがほとんどだ。私も親のお使いで贈答品を宅配業者に持っていったことがある。贈呈品を開けて包装を換えて別の人への贈答品にしていたのだ。

ケチっているわけではない。量が多すぎて家では処理できないので再利用するのだ。……父はそう言っていた。バレると問題なので、本当の得意先やお世話になってる人については、お店で頼んでいた。それに一緒に行ったことがある。

家から送る場合はただの宅急便として扱われる。しかし、お店で頼むギフトは依頼主が宛先を知っていないと送れない。なぜかというところ、ビジネスとしての性格を帯びるものだと『送ったつもりが送られてなかった』なんてことが会社間の問題に発展しかねないからだ。ギフトコ

ーナーの店員から、領収書に間違いなく送られたことを保証することが明記されている代わり、はじめから住所が間違えていた場合に発生した諸々については免責させてほしい、と書面と口頭で説明があった。面倒だな、とそのときは単純に思った。

これを使えばもしかしたら家出人の住所を知ることができるかもしれない。ギフトの注文は元の住所宛にするが、領収書には転送先の住所が記入されているかもしれないからだ。

早速、ネットにある生鮮食品をギフト配送してくれるところを探す。これは普通の通販サイトで見つかった。送れるものはいろいろあるけど、適当にハムとかでいいだろう。宛先は霧上さんの実家を入力し、差出人は嘘偽りなく自分の住所をいれる。支払い方法は最速の電子ウォレット払い込みにして注文確定ボタンを押して……。

すぐにエラーが返ってきた。

『その宛先への送付は出来ません』

んん。これはどういう意味だろう。

入力欄に間違いがないか確認する。……さすがにそれはない。単純な入力エラーというわけではない。霧上さんの家族は引越していないのは住所を調べている過程で確認している。

家出人だからエラーなんだろうか。

「……なんで家出してるってわかるんだろ」

それとも、いないことだけがわかっているのか。

別の通販サイトで同じ事をする。すると、使っている通販システムは違うように見えるのに、全く同じ『その宛先への送付は出来ません』の文字列。念のため、もう一つ別のサイトで試すけども全く同じ。

試しに、自分の名前で実家宛に送ろうとしてみる。すると、エラーは発生せず注文が確定された。ハムは明後日には届くらしい。

霧上さんだため、私宛なら送れる。

つまり、システムの中で家出人かどうか調べているのではないか？ 本来なら警察しか知らないはずのその情報に通販システムからならアクセスできるということか。

お店でギフトを頼んでも同じことができるのだろうか。

翌日は店舗で注文してみることにした。

学園に体調不良の連絡を入れた後、山の上から市街地に下りる。

山から街までは遠い。三十分以上はかかる。まずは学園入り口のバス停から最寄りの市電駅まで行くのに十五分。市電に乗り換えて市街地に向かうので十五分。いつもどこかを工事している御坂駅を出て、先日まで報道陣が取り囲んでいた駅前ビルを横目に、繁華街の方に歩く。

駅前ビルの入り口には立ち入り禁止のテープが張られ、警備員が睨みをきかせていた。

私が選んだ店は、街で一番羽振りの良さそうなデパート。物が高い店が一番融通が利くという経験則である。

ギフトコーナーだけでフロアの半分を占め、ショウケースの趣さえある一角に入る。食品がこざれいに詰められた化粧箱が見やすく棚に並び、随所にある試食コーナーがいろいろいさせている。その中でも有名なメーカーは独立したコーナーを持っていて、商品の点数も試食コーナーの大きさも格が違った。

コーナーに入って手頃な値段の物がないか物色し始めると、私のような冷やかし目的にしか見えない学生にも店員が声をかけてくる。

「なにかお探しますか？」

用意しておいたセリフを返す。

「友人の回復祝いにお肉を贈りたくて……」

ひいき目に見ても高校生にしか見えない私が友人にハムを贈ろうとするのは、いくら何でも背伸びしすぎというものかもしれない。しかし、店員のおばちゃんはそんなことはおくびにも出さずに、それとなく予算を聞いてきた。

「四千円くらいで、できれば量を食べれるものを」

おばちゃんはパーティー目的と察して、質はそこそこ、量はたらふくなギフトセットのところに私を連れて行く。実際には何でもいい私はすぐさまそれに決めて、カウンターで伝票を書きに行った。

おばちゃんが商品やラッピングをぼんぼんと画面に入力していき、問題の住所入力のところになつて私に端末が渡された。

宛先の名前と住所を入力する。もちろん、家出後の住所なんか知らないのでもともの住所だ。すると、確認ボタンを押して砂時計マークが数回転後、『宛先エラーです。詳細は係員におたずね下さい。エラー番号301』の文字。

「あら、おかしいですね。宛先は間違つてないですか？」

「訊いてきた住所なので、たぶん……」

端末にメモつてある住所を再入力してみる。元の住所は別に間違つていないけど。

二回目のエラーは『転送アドレスです。詳細は係員におたずね下さい。エラー番号301』とメッセージが変わった。エラー番号は変わらず、メッセージだけ変わったのは二回目だからだろうか。

どきどきしている私に、おばちゃんが訳知り顔でふむふむとうなずいた。

「どうも引越されているようですね」

「わかるんですか？」

「ええ、ここにそう書いてありますから」

手で示したのは『転送』という文字。

「すごいですね。そんなことわかつちゃうんだ」

「運送業者さんのシステムと連携しているのです、これがないと配達可能日がわかりませんから。転送先の住所はお役所と連携しているみたいですよ」

どうということもなさそうな顔で言つて、なにやら操作すると住所が私の知らない物に変わった。

「あ、あのー！」

「はい？」

落ち着いて話せるように、一呼吸置いた。焦るのは良くない。

自然に。自然に。

「新しい住所教えていただいてもいいですか？ うっかり前の住所を覚えてもらったみたいですし、これからお見舞いに行くのに家がわからないと困るので……」

おばちゃんは、そうですね……、と思案げに中を見上げた。

「ごめんなさいね。ここの住所の情報については、お客様にお伝えできないんですよ。決まりでそうなっています」

「そうですか……」

よしんば引越したとしても、引越し先の住所を教えたくない人間もいる。転送先の住所を客に見せられないというののもつとものだ。となると、領収書にも元の住所しか書いていないだろう。

一筋縄ではいかない。すぐそこに答えがあるのに触れられないもどかしさを感じる。

だが、焦るのは良くないのだ。チャンスはまだある。

私はおばちゃんの胸にあるネームプレートの名前をしつかり覚えた。笹垣ささがきさん、ね。

「わかりました。今度本人に聞いてきます。そちらのお肉は贈っていただいてもいいでしょうか？」

とりあえずハムだけ贈っておこう。私がこれから行くという宣言だ。

その後、三日ほど作戦を練ったり準備してたりしていたのだが、ハムが受取人不在でもどつてきた。

居留守か。そんな手を使われるとは。

実家から転送されてきたハムと一緒に、冷蔵庫にしまっておいた。

次の作戦は、こうだ。

同じ場所のギフトコーナーで、今度は大変目立つ買い物をする。

この前行ったとき、カウンターの後ろに吊ってあった肉塊。大きさはテニスラケットを二回りほど大きくしたくらいあるもの。

あれはどうやら生ハムげんぱく原木げんぱくというらしい。

スーパーで見かける薄切りで上品なほど量が少ない生ハムは、あの原木と呼ばれる肉塊からそぎ落とされたもので、生ハムは元々はあのような木材のような色をした豚の足一本から作るそう。表面は乾燥して固く、アレを持って霧上さんの頭を殴ればさぞや気持ちいいだろう。殴りはしないけど。

とにかく、そのような巨大な肉塊をギフトで送付し、さらにそれを置く専用の台もあわせて送る。すると、大きめの家庭用のテレビと同じくらいの荷物になる。しかもこれは冷暗所での保存、宅配時は要冷蔵というところがミソである。

ギフト配送をお願いすると、住所は見せられないと言われるけど送達確認のために荷物番号だけは必ず渡される。

この番号を使って、配送業者のサイトで荷物の配送確認を行うと、今、送った荷物がどのあたりにあるかわかるのだ。しかし、これで追跡できるのは最寄りの配達店まで。その先、その配達店が担当するエリアのどこであるかはわからない。

そこで荷物の大きさと要冷蔵であることが活かしてくる。

要冷蔵なら冷蔵車で送付が必要だ。普通の配送車じゃなくて冷蔵機能を持った車は外見から判別できる。そこから取り出されるテレビほどの大きさの箱なんて、普通ない。さらに配達時

間を指定することで、その車が配達店から出発する時間を絞れる。

つまり、配達店を見張っていれば宛先の住所まで連れて行ってもらえるということだ。

再び、前と同じデパートの同じギフトコーナーを訪れ、前回担当してもらった笹垣さんと呼んで対応してもらおう。この前はどうかありませんかと挨拶を交わした後、今度は生ハムの原木を送ると伝える。住所を聞き忘れたとまた言い訳しながら旧住所を入力し、現住所に変換。荷物の配送を時間指定にして、荷物番号をもらった。

指定日時は土曜の午前にした。

### 3

土曜の早朝、携帯食と水筒と秘密兵器をデイバッグに詰めて出発した。

暇そうな老人と、休日なのに仕事に行く風のサラリーマンがまばらに座っている電車に乗って、配達店最寄りの駅まで行く。

駅のレンタルサイクルで自転車を借りた。シティサイクルではなく、スピード重視の軽い自

転車だ。よく公道を走ってるレーシングタイプである。車を見失うわけにはいけないので、少し値は張るけどしかたない。ヘルメットを受け取って一日分のレンタル料を払った。

地図アプリのナビを聞きながら自転車を走らせる。休日の朝は静かで、車通りも少ないからスピードも出せる。初秋の風が気持ちよかったが、配達店にはすぐついた。

配達店の前には車が何台も並んでいた。作業をしている人は見あたりなく事務所の中も暗い。一応、事務所の扉を開けてみようとしたが、鍵がかかっていた。営業時間は九時からだったはずだから、作業員が来るのは早くても八時だろう。

配達店の前に止められている車のうち、冷蔵機能を持つ車は一台だけだった。靴から秘密兵器その一である発信器を取り出し、電源を入れた後車体の屋根の上に放る。パチン、とマグネツトでくっついた音がした。

店の前で見張っていると怪しまれるので、店の前を見張れて、かつ、長時間いても怪しまれない場所を探す。幸運なことに、道路向かいで店から十メートルほど離れた場所にバス停があり、ベンチが据え付けられていた。ガードレールに自転車を立てかけ、誰かと待ち合わせをしている風を装って座っていることにする。

朝が早かったために何も食べていない。

バッグからおにぎりとお水を出した。頬張る間も店からは目を離さないが、散歩らしきおじいちゃんが通りがかるぐらいで、配達店が開く様子はない。

時間はまだ早い。焦るような時間じゃないのだけど。

食べ終わった後、本を読むフリをしながらチラチラ見張る。たまにページはめくるけど中身なんて見ていない。

七時の間はだれもこなかった。

八時ごろに社員らしき人が事務所を開けた。

十分もせずに、何人かバートのおばさんらしき人がやってきた。このあたりが出勤時間か。八時半頃に配達担当のドライバーらしき肩幅の張った男の人達がわらわら来た。

倉庫前面の大きなシャッターが開き、背の高いラックがいくつも現れた。荷物が配達順に積み込まれているらしく、ドライバーの兄さん達がラックに張られた番号を確認しながら車に積み込んでいる。ラックは背が高いかわりに幅は広くない。あれなら、生ハム原木セットは収まらずに素のまま運ばれるはずだ。

私は冷蔵車をじっと見ていた。

案の定、キャリアに収まりそうにない大きな段ボール箱が、二人がかりで運ばれてきた。見

た目ほど重くないのか、それともお兄さん達の筋力によるものか、軽々と冷蔵庫車に格納される。それが最後の荷物だった。店舗から出てきたおばちゃんが紙を配り、ドライバー達はそれをみながらミーティングを始めた。

本を閉じて、端末を取り出す。発信器はGPSの位置を定期的に送信している。最後の信号が受け取れていることを確認した。

数分でミーティングは終わった。二人ペアで配達車に乗り込み、次々と発車していく。冷蔵庫車が最後だった。私はそれを見ながら自転車に跨ってそろそろとこぎだした。

車はなかなか止まらなかった。離されないように走りながら、ぞくぞくしていた。次の交差点、次の停止線、そのどこで停車して荷物を運び出すのか、思い描くだけで息が早くなる。

私達が思いを吐露したあの赤い光に満たされた部屋は、いなくなった二人とともに密閉されて消え去った。

今、あるとき私が言った言葉を繰り返してつぶやいても虚ろに響くだけで、追憶の熱は体温より低くなってしまった。なぜなら、あれを語れる人間が私を置いて他にいなくなってしまうからだ。あの激情は、人を愛する麻薬のような心地よさはそれを跳ね返す相手がいてこそ燃え上がる。

私は今それに近づいている。

再び火が灯る。胸が躍る。

憎らしいのか、焦がれているのか、自分でもわからないけど。

最初の荷下ろしは、残念ながら小荷物。次も、その次も。だが、荷台から見える冷蔵スペースには私が送った大きな段ボールが見えていて、肩すかしをされたという気分には全くならない。一時間以上、街の中を引き回されても苦痛ではなかった。

古い集合住宅の敷地に入っていた車が、建物の入り口前で停車した。車のエンジンはアイドルではなく止まっている。しばらくここで停車するようだ。配達員が二人とも下りて後ろのハッチを開き、冷蔵庫の内扉を開いた。手をかけたのは大きな段ボール。

敷地の入り口で様子をうかがっていた私は、自転車から飛び降りて帽子をかなぐり捨てる。配達員は二人がかりで荷台から荷物を運び出した。

ついにたどり着いた。次は部屋番号を突き止めなければならない。

そこは人の気配が少ない、官営のマンションだった。特徴のない白い壁の建物が六棟あり、棟の番号が壁に書かれている。建物の間にはぼつぼつと雑草が生えた公園があるが、誰もいない。駐車場にはまばらに車が止まっていたが、どれも薄く汚れていてしばらく動いていないよ

うだった。配達車はその駐車場の開いているスペースに止められており、近くの入り口にはエレベーターが設置されているようだった。

配達の二人がエレベーターのボタンを押して、中に乗り込むのを遠目から確認すると、私は猛ダッシュした。何階で下りたのか確認しなければならない。そして、すれ違う必要があった。エレベーターのインジケーターはまだ上っていた。五階、六階と変わっていく数字を睨みながら、とりあえず上行きボタンを押してエレベーターのカゴを呼び出す。

数字は七階で止まった。意味もなくボタンを連打するが、カゴはすぐには動かない。荷物を降ろして扉が閉じ、それからゆっくりと下りてきた。

開いたエレベーターに飛び乗ってすぐさま七階を押した。もし部屋がエレベーターから近かった場合、配達員の二人はエレベーターを待ちきれずに階段を使ってしまいかもしれない。ここで入れ違ってしまったら部屋番号がわからず、もう一度ハムを送ることになる。

七階に到着して扉が開くと、どういうわけか、目の前に配達員の二人が荷物を抱えて立っていた。

お腹の内側を冷たい物が滑り落ちるが、ここで動揺するわけにいかない。この二人が私に尾行されていることに気づいたとは考えづらい。まだ作戦は破綻していない。

二人は私が下りれるように道を譲るだけで、別に何も言わなかった。やはり気づいているわけではなさそうだ。しかし、荷物をまだ持っている。受け取られていないということか？

再び居留守を使われる事態は想定していた。用意していたセリフのうち、受け取られなかった場合のほうをゆっくりと言った。

「あ、その荷物、うちのですか？」

配達員の片方が言った。

「ええと、おたくはナナマルサンの霧上さんですか？」

ナナマルサン。七〇三か。

「あ、すいません。うちじゃなかったですね」

「そうでしたか、それでは失礼します」

礼儀正しい配達の二人は私に会釈すると、扉を閉めて一階に戻っていった。

エレベーターを見送った私は、ゆっくりと振り返った。

コンクリートの床は掃除がされておらず、白茶けた土埃が積もり、風が動くたびに模様を変えている。天井の蛍光灯は端が黒ずみ、小さな蜘蛛の巣が張っていた。壁の塗料は所々剥がれ落ちてひび割れが露出し、建てられてからの年月を偲しのばせる。不良の落書きと思われる、何かのチームエンブレムのような模様も、消されずに残っていた。

空き家が多いようだった。郵便受けには『投入禁止』と書かれた目張りがしてある家が多く、逆にされていない家にはこれでもかというほどチラシが詰め込まれていた。

もう少しで昼時だというのに換気扇の回る音もない。時折、近くを車が通りがかる程度で、静かなものだった。

これなら、少しぐらい叫び声が上がったところで誰も気づかないだろう。

ドアに張られたナンバプレートの一つ一つ確かめながら歩いていく。どこの家も表札は出してないので名前はわからない。七〇三もナンバプレートがそう書いてあるからわかるだけで、霧上さんの家らしき形跡は何一つない。ドアの前には傘立ても観葉植物も何も置かれてないし、電気メーターが静かに回っていることだけが、この家に誰かが住んでいることを示していた。

インターフォンを押す前に、何があってもいいように準備する。靴から出したのは、使い捨てのゴム手袋、白いマスク、だて眼鏡だ。指紋を残さず、痴漢撃退スプレーを無効化する。あと、襲われてもすぐ通報できるように端末にあらかじめ番号を打っておいた。通話ボタンですぐに警察に繋がる。

最後に出したのは伸縮式の警棒。オモチャのようなちやつちな物だが、威嚇の役にぐらいい立つだろう。これはズボンの背中側に見えないように刺して、すぐ抜けるように片手を添えた。とっくみあいになったら柔道やつてる私に分があるが、包丁でも出されたら困る。

一度深呼吸して、インターフォンを押す。

チャイムの音がドア越しに聞こえる。人が中で動く気配はしない。もう一度インターフォンを押してみる。反応はなかった。

居留守なのか、たまたま留守なのか。

もしかしたら中から私の姿を確認して出ないのかもしれないが、それくらいはこちらも想定済み。なんのためのゴム手袋か。

ドアノブを握り、ゆっくりと捻る。軋きませて甲高い金属音がならないように、ゆっくりと。

限界まで捻った。今度は引く。これも嫌番がきしまないようにゆっくりと。もし鍵がかかっ

ていたらその音もしないように。

すると、ドアの側面が全て現れて中に外の空気が流れて埃が舞った。

鍵はかかっていたいなかった。

まだ大きく開いたりしない。チェーンロックがあるかも知れない。しかし、上から下まで確認したがそのような物は見あたらなかった。

それでも最後まで、ゆっくりとドアを開いていく。人が一人滑り込めそうな隙間を開いて、私はその体をねじ込んだ。そして後ろ手に扉を閉める。

玄関は再び闇に満たされた。目が慣れるまでじっとその場から動かず、音で様子をうかがう。どこかでブウウンと低い音がするほかは、なんの音もない。

目が慣れてくると、まわりがよくわかるようになる。まず、玄関なので靴がある。私も使っているローファーだ。御坂学園の指定の物だけど、こちらの学校でも同じ靴をつかっているようだ。他にはスニーカーが一足とビニール傘が壁に立てかけてあるだけだった。

玄関の正面奥には、居間につながっているであろう磨りガラスのドアがある。玄関からすぐ右はカーテンで仕切られていてわからないが、洗面所や風呂だろう。そちら側は暗いので、寝てるにしろ、居留守にしろ、いれば居間のほうにいる。

上がろうとして、靴を脱ぎかけてやめた。逃げるとき裸足では困る。悪いけど土足で上がらせてもらおう。

床がみしりと鳴る。フロアリングがわずかに沈み込んだ。

短い廊下を歩き、居間のドアを開く。音を立てないようにそっと押し開く。

居間は殺風景だった。

台所のシンクの横で冷蔵庫が低くうなり、部屋の真ん中に折りたたみでできるタイプの背の低いテーブルがおいてあるだけだった。最低限の生活ができるだけの部屋である。居間の奥にはもう一つドアがあつて、開いていた。ドアの向こう側はカーテンが引いてあるのか、暗い。

寝室だろう。この部屋にしなければ本当に留守である可能性が高い。

居間を横切つて寝室の前まで行くと、壁にべつたりと張り付いて寝息が聞こえてこないか探る。衣擦れや吐息を探るが、何も聞こえない。静かだ。

そつと顔だけ出して中を確認する。

フロアリングの上に敷きっぱなしになっている布団。その脇にプラスチックの衣装ケースがあり、奥には未開封らしい段ボールがいくつか積んである。布団の中には誰もおらず、部屋にはクローゼットも押し入れもないため、隠れられる場所はない。

本当に留守なのか。ほっとしたような、残念なような、そういうため息が出た。留守ならここに用はない。戻ってくる前に外に出なければ。

早速で居間を横切って元通りにドアを開けて、洗面所を仕切るカーテンを見て思った。一応確かめてみよう。

カーテンをめくりかけて、機械の動作音のような低い唸りが、冷蔵庫だけではなくこの奥からも聞こえる事に気づいた。

換気扇の回る音だろうか。

そうっと開けてみる。

「……!?!」

何かが顔に飛んできた。軽い衝撃の後、耳元を低い羽音が鋭く通り抜けた。

……虫だろうか。驚かせないで欲しい。

中は暗かった。窓もなく明かりもついていないのだから当たり前である。音は奥の方から変わらず聞こえるが、心なし大きくなった気がする。

壁を探ってスイッチを押す。

予想通り、なんとということもない洗面所だ。コップに歯ブラシ、歯磨きにドライヤーとヘア

コーム、そういったごく普通の物が棚に並んでいる。他にはタオルが床の上に無造作に積んでいるのが気になるが、家具がないなら仕方がない。よく見たら洗濯機もなかった。

家出は苦痛から逃れるにはすごく良さそうだが、そのあとの生活は大変そう……。

まずはトイレ。ドアをがちやりと開けるが誰もいない。

次に風呂場。風呂場の扉は磨りガラスのはめ込まれた扉だった。扉の横にあるスイッチを押すと、中の灯りがついた。

開けようとした手が止まった。

ガラスに奇妙な影の模様が浮き上がっていた。模様は細かく輪郭を変えて、アメーバのようにのたくっているようだった。何かが張り付いているように見える。

低い音は近寄ったことでより大きく聞こえている。こんな蠢く何かを見てしまったら、もう換気扇の音だとは思えなかった。

ハエか、なにかの虫なんだろうな。先ほど顔にぶつかったのはここから出てきたに違いない。私は直感した。これはマズい。だいぶ良くない。

『家出少女』、『風呂場』、『大量のハエ』とここまで揃うと、自然と『自殺』『腐乱死体』みたいな言葉を連想すると思う。警察の出番なわけだが、そこで最高に怪しい私が第一発見者にな

るといわけだ。

土足で入ったのがアタになった……。

秋月は『死んでもいいし生きてもいい』と言っていた。量子論の猫のごとく、この扉を開けて誰かが確かめない限り、死んでいることが確定していないという意味なのか。

詭弁だ。自殺が成功している時点で死んでいるのだから、そんな言葉遊びで誤魔化されたりするものか。秋月や坂木先輩が直接手を下したわけではないのだから、彼女たちを糾弾するのはお門違いかも知れない。でも、私に意味のある言葉を返せる人間はとうに失われていて、それを隠していたのなら、不誠実だとなじることくらいはできよう。

ふう、と息を吐く。なじってどうするんだ。八つ当たりがしたいだけなのだろうか、私は。なんにしろ、ここを開かなければならない。死体なら死体を確認しておかないと、なじることすらできやしない。

だが扉を開く前に、それをびっしり覆っているハエを追い払う必要がある。割れない程度に強くガラスを叩くと、ぱんつと大きな音がして、黒い影がぱつと散った。飛び上がった虫の羽音が酷くなり、ザバアと水の音がした。

え……？

思考が停止した。水の音ってなんだ？

ざばつざばつとさらに二回の水の音がした。そして水が床に跳ねる音。誰かがバスタブから立ち上がって出てきたかのように。ハエだらけの風呂に浸かっている人間が近づいてきている。

磨りガラスに大きな影が映る。

扉は勝手に開いた。

突然の縦揺れが私を揺さぶった。視界が揺れるほどの揺れで、バランスを崩して尻餅をつく。開いた風呂場から、まるで巣をつつかれた蜂のように、黒いハエが沸きだして洗面所に散った。そして、白い何かの扉の端を掴んで立っていた。

扉を掴んでいるのは、イカの触腕のようだった。その触腕は、軟体動物のような骨格を感じさせないカーブを描いて、本体らしきものに繋がっている。本体はこれまでイカのような、だらしなく弛緩した白いぶよぶよの塊で、そのてっぺん付近に濡れた髪のようなものがまばらに固まっていた。髪があるからには、そのあたりがどうやら頭らしいというのはわかるものの、肉が褻ひだのようになっているせいで顔もなにもあったものではない。全体的にナメケジのような印象にもかかわらず、二足で立っているからには元は人間であつたらしいと、予想できた。不気味な透明感のある白い肉のところどころに青黒い筋が走っていたが、それは血管というより

も腐敗した汁が体外に漏出するうちにできたものに違いなかった。臭いはなるほどハエが好き。そうな腐乱した果物のような、吐き気を催すものである。

息を呑んでへたり込んでいる私に気づかないのか、肉塊は動きもせずに風呂場に直立している。このままでいるとあの腕に絡め取られて白い肉の一部にされかねない。

逃げなければ。なるべく速くかつ静かに。

散ったハエが、臭いに釣られて戻ってきて、ぶんぶんと肉塊の周りを覆い始める。それを視界の中心に入れながら、じりじりと後ずさりした。後ろ手で障害物がないか確かめながらフロアリングの床に尻を滑らせていく。玄関まではほんの数メートルだ。そこまでいけばドアがきしんで気づかれても走ればなんとかなる。

前も元人間に追いかけられたことはある。彼らの感覚は、人間だった頃と変わらない。一度距離を離して身を隠せば見つけられっこない。

たつぷり数分をかけて、玄関まで身を引いた。

肉塊はもう見えず、ハエの飛ぶ音は小さくなっていた。音を立てないようにそろそろ立ち上がり、ゆっくりと玄関の方を向く。

絶句した。というか甘かった。

ドアのあった場所を黒い虫が覆っていた。黒すぎてその数が多すぎて、輪郭がはつきりしない、そんな黒い虫がひしめき合っていた。ハエなんかじゃない。Gがついてヌメリ感をアツプしたヤツに似ている。

すんでの所で声は上げなかったが、びっしりと虫が埋め尽くし蠢いている光景に胃の中身がぐるぐるする。丸い形のドアノブだけは滑って登れないのか黒虫はついておらず、その金属の光沢が私のなげなしの冷静さを保ってくれた。

黒虫には触らないように、ドアノブをつまむ。かさかさという音が私の理性を削っていくが、指先にぎゅつと力を込めてゆっくりと捻る。

ガンという音で開きかけた扉が止まる。衝撃で黒虫がバラバラと床に落ちた。

ドアと枠を繋ぐ銀色のチェーン。そんなもの、全然かけた覚えがないのに、今はかけられていた。

「だれ？」

風呂場のあるカーテンの奥から霧上さんの声が聞こえた。

一時は憎悪しか感じなかったこともある、そのか弱げだが誘蛾灯のような甘やかさを持つ声。そんな声がカーテンの奥から聞こえてきた。そちらには白い塊しかいないはずなのに、以前の

ままの霧上観世子がそこにいるような錯覚を覚えてしまふ。

待て待て、正気に戻れ。そんな悠長なことを考えている場合じゃない。

玄関から出るのを諦めて居間にダッシュする。カーテンが、しゃつと開かれた前を走り抜けた。横目で見てもやはりぶよぶよした白い塊のままだ。断じて霧上さんなんかじゃない。

居間のドアを体当たりするように開けて飛び込む。入った勢いで扉を叩きつけるように締めると、濡れた雑巾が壁にぶつかるような音がした。ドアのガラスに汚い血管が浮いた白いものが押しつけられていた。

玄関の他の出口といえはベランダ。窓ガラスの鍵を外して外に飛び出した。

一般的に、マンシヨンのベランダは、火事などの時に隣の部屋に移動して逃げられるように仕切りが壊せるようになってる。ここのベランダも同じはずだ。

だが残念なことに、ベランダを物置として使う人も多い。たとえば車のタイヤ、買い換えていらなくなった古い洗濯機、捨てるまでの一時期とはいえ、家の中にそういうものをおけるスペースはなく、ベランダに置いていることはあるだろう。

この場合だと、左隣はタイヤ、右隣は洗濯機だった。それらが仕切り板にびつたり寄せて置いてある。これでは仕切りをケリ破つても向こう側に行くことは出来そうにない。

白い肉塊はドアを開いて居間に来ている。他の方法を考える時間はなかった。

私は手すりをよじ登る。

マンシヨンの七階の高さだ。落ちたらただでは済まなそう。下には植え込みとか、都合良く張り出した木の枝とか、そんなものは一切なくコンクリートの駐車場だ。足の骨を折るとか、ねんざするとかどこかおかしくするに違いない。

触腕が窓を開けようとしていた。一刻の猶予もない。

柵の外側に下りると、隙間に足を入れて横に移動し、隣のベランダに向かう。あの怪物は、人に比べて重さも体積も大きい。あんだけ大きければ重いだろうし、こんな風には移動できない。仕切りの位置を超え、隣の家のベランダに入った。逃げ切ったことを確認すると同時に、ドンッと突き上げるような激しい衝撃。風呂の扉が開いたときと同じ衝撃が、私の体を揺さぶる。ふわっと体が浮いたような気がして膝から力が抜け、両足が柵の間から滑り落ちた。反射的に目の前の柵をつかむが、柱をつかんで体重を支えられるほど私の握力は強くない。

ずるずるとずり下がる。ゴム手袋はすぐさま破けて、手のひらに皮膚をこそげ落とすような熱さを感じながらも離さず、柵の下端までずり下がってやつと止まった。

いったい何なんだろう。地震にしては不思議な縦揺れだ。イカが出てくる直前にもあった

し、何かまたおかしなものが沸いたのかもしれない。この世界からの脱出方法はわからないものの、とりあえず脅威からは遠ざからなければ。

体が完全にベランダから落ちている。足は空中でぶらぶらしていた。そして体を引っ張り上げられるほど筋力はない。下を見ると、階下のベランダの柵があった。足を伸ばせば届きそうだが、飛び込まなければベランダの外に落ちてしまいそうだった。

腹を決めて、体を前後に揺らして反動をつける。手首付近の肉が骨とアスファルトに挟まれて痛いがかまわず、十分に反動をつけたところで下の階に飛び込んだ。

靴を派手にならして着地した。このベランダには何の荷物も置かれていない。足の裏がじんじんするけどすぐに立ち上がって、一番大きい居間の窓から中を覗く。ラッキーなことに空き家だ。

『た〜けやー、さ〜おだけ〜』

ガラスを割ろうと足を上げたところで、あの特徴的な節回しが遠くから聞こえた。

……………ちよつと待てよ。

なぜこの異界に他の人間がいる？

硬直していると、バンバンバンと布団をたたく音が、団地の建物に反響して大きく響く。

さらに道路を車が通る音、カラスの鳴き声などがどこかから聞こえてくる。

いつの間にか、元の世界に戻ってきていた。

「ガラス割ったらまずいか……」

結局、その日は暗くなるのを待って、それからベランダ伝いに下に降りた。

手は火傷してるし、そんな状態で暗くなってしまっってはなおさら降りづらくなるかと思っただが、現実世界に戻ってしまったら一番怖いのは警察である。ガラスを割ってその音を聞かれたら、ベランダを降りるところを誰かに見られるわけにはいかなかった。なぜここにいるのか、どうしてガラスを割ったりベランダから降りたりしているのか、どちらも答えることはできない。ましてや、イカになってしまった元クラスメイトと結びつけられて考えられたら、状況からただでさえ怪しいのに動機まで付け加えられてしまう。冤罪で前科がつくなんてごめんだ。

暗闇は心配するほど降りるのに支障をきたさなかった。町中なので明かりがないわけではないというのと、仕切り板ほどの階でも同じ位置にあるので、その柱に掴まりながらなら意

外と楽に降りることができたのだ。

最後は横着して二階の高さから飛び降りた。駐車場のアスファルトは当然だが固く、衝撃を全体を曲げて吸収してもなお骨に響く。しかし、この泥棒のような所行の非現実感が神経を高ぶらせて痛みを消していた。

靴裏が大きな音を鳴らしたので、さっと車の陰に隠れて周りの様子をうかがう。周りに人影なし、話し声なし、窓の開く音もなし。私は立ち上がり、自転車を放置していた場所に戻る。そういえば鍵もかけていなかったけど、盗まれてないだろうか？

自転車は道路の脇に寄せられて、サドルに帽子が引っかけてあった。親切な誰かがしてくれたい。なんとなく通りすがりのおじいさんか誰かがやってくれたような予感がする。地域の治安の良さに感謝である。

駅に戻る途中、ドラッグストアで多機能絆創膏を購入し、遅すぎる応急処置を施した。よく見ると皮膚が帯状にこすられて剥がれていて、肉が見えているところは血がにじんでいた。絆創膏の上から包帯を巻いて痛々しい傷を見なくてすむようにしてから駅にもどり、自転車を返した。手続きしたおじさんが、返却予定時間をかなり過ぎていたので探しに行こうかと思ったと話してくれた。発信器がフレームに内蔵されていて場所がわかるらしい。私が配達車にしたのと同じことがされていたようだ。盗む人間がいなくても領ける。

そうして私は一時間ほど電車で揺られて御坂に戻った。

5

次の日の朝、端末でニュースを表示させていたら、見覚えのある団地の写真が載っていた。死後数ヶ月と思われる死体が発見されたらしい。死因ははっきりしないが状況から見て自殺だそう。その体はほとんど白骨化していたけども、半分ほど残っていた肉の放つ異臭に隣の家の人気が気づいて通報したと書かれていた。

二重の意味で、朝から食欲のなくなるニュースである。

一つはそのグロさ。死の状況が生々しい。必要のない情報だと思う。

もう一つは、その仕掛けと手際のおよさである。私が侵入した次の日に公に死亡させるなんて。私が霧上観世子に接触したことで、その死亡が世間に公になる可能性ができたわけだが、予測不能な形で公になる前に、都合のいい形で死をお膳立てして殺してしまったのだ。書類上で

生きていたのに、事実に合わせて死なせたのである。

たぶん、写真が撮影されるよりも前に、もしかしたら私が赤い部屋で最後に見た後に本当は死んでいたのかもしれないが、一夏超えて半分白骨になっているような死体では正確な死亡時刻を出すことは難しい。駅前の店に残された購入履歴と、怪しげな人影の写真があるわけだし、公式の死亡時期は夏よりも前に遡ることはないだろう。それに反論するだけの根拠も証拠も、時間の流れが風化させてしまっている。

私はもちろん、あの日の直後に霧上さんは死んでいて、誰かがその死亡時期をずらすためにこれだけの仕掛けを作ったと信じてるけど。

朝食はしっかりとって登校した。授業は上の空で、私は自分が迷い込んだイカの世界のことを考える。

私が普段いる世界と、あまり変わらない世界だった。ただ、イカ人間がいることと、ゴキブリが大量発生していたのと、私以外の人間がいなことだけが、違いだった。

他の異界はどうだったろう。

学園の七不思議。御坂神社の境内に展開された霧の迷路。駅ビルに接岸した浮遊大陸。

どれも異界が発生したが、神様が作り出した霧の迷路や魔女が創造した浮遊大陸のような規

模が大きすぎるのは例外と考えても、少なくとも、学園の七不思議については共同幻想とやらが前提知識としてあった。魔女から受けた講義によれば、まことしやかにささやかれる噂が共通認識としてあるコミュニケーションの中でしか、異界は発生しない。私が学園七不思議の一つだった「焼却炉の呪い」を霧上さんにかげられたのは、彼女がその存在を名前だけでも知っていたからだろう。逆に私が『憎しみの血』の呪いで異界に送られたのもそれを知っていたからだ。しかし、昨日のイカの世界について、私はなんの共同幻想も持っていない。秋月から渡された写真と、担任の先生から家出届がだされているということだけが、知識としてあっただけだ。もちろん、今まで死んでいるのかもしれないと考え続けていたのだし、その可能性については常に念頭にあったことは認めるところである。にしても、あんな直立歩行するイカに変貌するような想像はしたことがない。

『憎しみの血』で送られた異界には、思い出したくもない男子が生きたまま一ヶ月ほど閉じ込められて、人ではないモノに変貌していた。異界はこの世界の法則や常識が通じないから、人間をやめてしまうように変化させられる可能性は否定できない。でも、私と霧上さんの間には浅からぬ確執があるとはいえず、昨日のあの風呂場で死体が蘇ってイカになるような法則が働くには時間が短すぎるように思える。

まあ、こうして考えていても答えの出ることじゃない。

ほーっとしながら放課後まで授業を流し、秋月の研究室に行ってみる。有識者の意見を聞いてみるのが一番の近道だ。部屋にいらなくても、またメッセーじぐらいいは残されているだろう。

ドアを開くと、暗い部屋の中で案の定、環境透過ディスプレイの端でアイコンが明滅していた。アイコンに触れると、スクランブルされた画像ではなくてテキストチャットが開いた。

『生還おめでとう』

その文字を見た瞬間、あれこれが誰のお膳立てなのか直感した。

『おめでたくなんかない。私にここに來るってわかってたみたいですね』

『昨日は大変そうだったからな。あれこれ想像を巡らせてみるものの、結局ここに来るんじゃないかとね』

見ていたかのような言い方。自転車脇に寄せられていたことを思い出す。

『それであつちのためにわざわざチャットを立ち上げていたわけじゃないですね。また何か教えてくださいませんか？』

『聞きたいことがあるのは君だろうか？ 今日の講義は質疑応答といこうじゃないか』

聞かれなかったから教えなかったみたいなのをされそうで怖い。質問は慎重にしないと。

『待って、昨日のこと、どこまで知ってるんです？』

『一部始終を知っていると考えてもらっていい』

『じゃあ、まずそれからですね。どうして知っているわけ？』

浮遊大陸の上では秋月の独壇場だった。所有者だから、とのことで意味はわからないがそういうものなのだろう。秋月の作った異界なのだとしたら、前の赤い部屋のように何でも思いのままになることは納得できる。でも、昨日のイカがいた世界はそうではない。

『君がこつちの世界からいなくなる所までは窓の外からみていた。そのあとは知らないな』

……なんだ。見てないのか。

『一部始終じゃない』

『こつち側で起きていることは一部始終だな。お前が入っていった部屋の中まで踏み込めば私もそちら側に入れたんだが』

『あつちに自由に出入りできるの？』

『入るのはそんなに難しくない。出るのは面倒だが不可能じゃない』

いくらなんでも万能過ぎやしないか。そんな出たり入ったりができるものなのか。

『納得できなさうだから言っておくが』

私の顔を見たかのように、チャットに文字が流れる。

『異界が発生する条件は共有する幻想だ。幻想に迷い込んで出てこれないなら幻想の外にいる人間がそれを知り、共有することは不可能だろう。異界に入り込む条件があるなら出る条件は必ずある。あとは見つけられるかどうかの差だ』

ふむ。論理に矛盾はないが、気になることはある。でもそれは訊かないでおこう。

『本題です。私と霧上さんの死体しかなかった風呂場でなぜ異界が発生したのか、わかりません。共有する幻想なんてなかったはず』

考え続けていた問いをぶつける。

『お前は死体を確認したのか？』

表示された文字を認識するのに、少し時間がかかった。

確認は……していない。

見たのはイカのような肉塊だけ。扉を開いたイカの横から死体がバスタブが見えた気はするが、その中にあるかもしれない死体は見えない。

『その様子だと、見ていないな。それが答えだ』

表示された文字の最後で明滅するカーソル。心臓の脈打つ音が加速し、カーソルの明滅より

早くなっていくのを感じる。

『見ていないから、異界が発生したってことですか』

『見ていれば、発生する可能性は低かったろうな』  
理解できない。

確かに私は死体を確認したわけじゃない。風呂場の扉は勝手に開いたし、開いたところにはすでに白い巨体が立ちふさがっていてバスタブの中を覗くなんてことができなかった。私は妙な振動で倒れてたし、下からイカを眺めることしかできなかった。

あそこで、あのイカの横から顔を覗かせてバスタブを見ればよかったのか。

そんなのでどうして異界が発生するのを抑えられるというのか。

そもそも、あのときはもう異界は発生してたじゃないか。

『無理です。だって扉が開いたときには変な地震で倒れて、しかも扉の前には白いイカみたいなのが立ってたんだから』

『ああ、私はそのあたりは見えてないんだ。そうか、空間振動を体感できたのか』

『そのときにはもうこの世界にはいなかったと』

『いや、物理的に観測できる位置にいなかっただけだ。こちらから消えたのは、その振動を感

じたときからのはずだ。

「そうだな、その話を信じるなら防ぐことは難しそうだ。異界から脱出できたのは、何か閃いたからか？」

「閃きなんて何も無い。ドアから出ようとしたらかけた覚えもないのにドアチェーンがかかって、さらにゴキブリみたいな虫で覆われてた。だからベランダから逃げようとした」

「ベランダで柵の外側に乗り越えたのは？」

「両隣の家が、大きな荷物を仕切り板にびったり寄せて置いていたから、ケリ破れなかった」

「ベランダに嵩張る荷物を置いておくなんてことは、ありそうな話だ」

「迷惑ですね」

「それで、乗り越えた後、隣の家のほうに移動したのか？」

「そう。あのイカの図体ではベランダの柵を乗り越えるなんて無理だと思ったから」

「なるほど。今の話でだいたい掴めた。お前はもう答えを知っているじゃないか」

「答え？」

「先ほども言っていた。それが答えだ」と。

「私は答えなんて言っていない」

「言っているぞ。そこには十分な共同幻想を持った人間がいたんだ。天満寺琴乃、お前自身だ」

「……私？」

「私一人で共同幻想なんて持ちようがないわ」

「共同幻想という言葉を見ると、確かに一人では無理だと思えるかもしれないが、この場合はそうではない」

「テキストベースのチャットとは思えないスピードで文字が流れる。」

「お前は一人で調べ、一人で現代の法をかくぐって行方を突き止める方法を編み出して実践した。ほとんど違法なピーコンを宅配便の配達車に仕掛けて追跡して、ついにその居所を突き止めた。元々武道をかじっていたお前が、だめ押しに武器まで手に握って家屋に侵入し、物色し、霧上がいないか探し回った。」

「見つけたらそのまま頭を叩き割りそうな形相でだ」

「全て必要なことだった。」

あの部屋であったことの続きをするには、必要な備えだった。話をしたかったんだ。

殺すつもりなんて、全くない。

「違うという顔だな。殺すつもりで獲物を探しているようにしか見えなかったね。幸いという」

か、とうの昔に事切れていた霧上は見つからなかった』

幸い、なんてことも全くない。

霧上さんにおつけるために用意していたいくつもの言葉は、もう吐き出す機会すらないんだ。『これでわかっただろう。霧上が見つからないことを恐れたお前が、幻想の霧上を作り出し、幻想の霧上が生きる異界を作ったんだってことを。日常の生活から乖離乖いりした行動と、お前自身の妄執が限定的な異界をあの場合に展開して、自らそこに入ったんだ。

霧上と対面するために。お前が持て余した暴力のはけ口を求めて、ね』

『確かに私は武器を持って侵入した。それはあくまで護身のためで、ただ話したかっただけ。

あの日の続きを、最後まで話したかっただけ』

『あの場で引いたお前には言いたいことはたくさんあっただろうな。でも、霧上と倉池はどうか？』

……それは、そのとおりなのだ。あの場で私は身を引いたのだ。

だけど、それならなぜ化け物なのか。

『どうしてあそこで現れたのがイカの化け物なのか、わからない。あんな巨体の化け物と話ができるなんて思えない』

『私の、この気持ちをぶつけるためにできた世界だというのに、それすらできないじゃない！』  
もう叫びながらチャットを入力していた。

秋月の言葉の表示が、少し遅れた。

『……………それはもう、何をしても無駄だってことに気づいていたからだろう？ たとえ生きても、霧上はお前のことなど気にしないってことに気づいていたからだろう？ だから、そのようにイメージされたんだ。お前の警棒も、柔術も、言葉も、何も効きやしない化け物に』  
これ以上、画面を見ていられなかった。

悲しくも何ともないのに涙があふれて、何も見えなくなったからだ。

邪魔だ。涙なんて邪魔だった。反論しなければ。

だが、視界と同様に指先も震えて使い物にならなくなっていた。

涙はぬぐえるのに、反論の文字を打つことはできなかった。

『先ほどまでの威勢はどうした。手が止まっているぞ』

しばらく目をこすっていたら、そんな文字が画面に表示されていた。

今もどこからか見てるんだ。私はようやく気づいた。

『どうやって見てる。私が忍び込んだときも、今も、見てるんでしょ？』

上の方から、フィン、と微かなモーター音が降りてきた。

それは私の肩の高さで止まった。ピンポン球くらいの金属球を中心に、四つの輪がくっついてた。輪はプロペラらしく、薄い羽が残像すら見えないほどの高速で回っているようだった。

『元々は自律飛行の観測ドローンだ。市内の電力プールを拠点にして気象観測や警備に使われるものだが、私が改造して異界発行情報の収集と偵察に使ってる』

全然気がつかなかった。昨日は外から、今日はこの部屋までついてきてずっと私を追っていたんだろう。

それにしても、ずいぶんテクノロジーを活用する魔女だ。魔女、というアナログな響きとはほど遠い。

『最後の質問、いい？』

『なんだ？』

『霧上さんは本当はいつ死んだの？』

『知ってどうするんだ？』

『あの人は私にとって憎い人ではあったけど、道を譲った相手でもある。だから、気になるの。バスタブに何ヶ月放置されていたのか』

『義憤か？ 警棒もって侵入した自分のことはもう棚に上げたのか？』

『それは私とあの人の問題だし、話に応じてくれるなら使う必要なんかないもの。死んでいる人間を弔いもせずに、放置するのは違うわ。』

それは冒流というのよ。そして、自分のライバルへの冒流は私への冒流と変わらないわ』

『ほう、冒流ときたか。まあ、教えてやる』

少しの間があった。

『そうだな、もうそろそろ三ヶ月ぐらいになるか』

予想はしていた。が、血が沸騰しそうになる。

それは私が二人と別れてすぐだ。やはり、あの赤い部屋から出た後、すぐに二人とも死んでいたのだ。

私はなんのために苦しい思いをしたのか。なぜ二人は死んだのか。

あの部屋の出来事は全て無意味だったのか。

『それって、あんた以外にも知ってる人、いるの？』

『ナナエはもちろん知っている。情報操作のために使った人間はいるが、彼らは自分が何をしているのかもわかっていないから、私たち二人だけだな』

先輩も……。先輩もか。

霧上さんに同情する。部活の先輩からそんな仕打ちを受けるなんて。

先輩も、どうしてそんなことができるのか。同じ弓道部の後輩なら、私よりも長く接していたはずだ。それなのに顔かたちがわからなくなるほどの時間、置いておくなんて。家族がどれほど悲しむだろう。数ヶ月も前に死んでいたことを知らされるのもそうだが、もうまともにお葬式に出すことすらできないのだ。

酷薄だ。なぜそこまでできるのか。異界や怪異の存在を秘匿するためとはいえ、もう少し、配慮できるのではないのか。

『ひどすぎる』

『そうか。まあ、そうだろうな』

『あんまりだとはおもわないの？ 霧上さんが何をしたらここまでする必要なんかあるの？』

『それは私に訊くべき質問ではないな。ナナエが出所したら直接聞くといい』  
変な文字が見えた。

『出所？』

『今のあいつは、駅前ビル探索班の唯一の生き残りだ。しばらくの間、療養という名の軟禁状

態に置かれるだろう。どれくらいになるかはわからない。数週間か、数ヶ月か』

そうか、先輩と一緒にあのビルを登った人たちはみんなカミヒが燃やしてしまったんだ。周りの大人達は何があったのか、知りたがるに違いない。

『一応、忠告しておくが、ナナエは私とは違う。素直に今の質問をぶつけたところで、答えてもらえるなんて思わない方がいい』

『私に対しては、説明するのが筋だと思う』

『そうかな？ 私なら答えざるを得ない状況にしてから訊くがな。そうそう、お前の輝かしい入門の記念に、その環境透過ディスプレイを使うことを許そう。声紋は登録しておいたから、ナナエが出所してくるまで間に訊きかたを考えておくんだな』

『……別に必要ない』

『そいつは強力だぞ。幻想を作り出すぐらい、朝飯前だ』

最後の文字列が表示されたあと、チャットから秋月が退室した。